

昭和三十七年十一月二十八日 講演

「ソ連・欧州を訪ねて」

塾理事長 前川喜作

今更欧州を廻って来たから、ソ連へ行つて来たからと云つて、海外視察談もちよつとおかしいし、私は私なりにものを見て来ただけで、しかもそれが主として仕事に行つて来たので、諸君に別に参考になるといふ程の事でもないのですが、予てからもつと数多く諸君と水入らずで話し合う機会を持ちたいと思つて居た矢先でしたので、今日は放談のつもりで二、三気の付いた事を申し上げて、後は諸君の質問にお答えするようにしたいと思います。

甚だ私事に亘つて恐縮ですが、昭和三十五年夏、私共の会社でソ連へ冷凍食品一万吨収容能力の冷凍プラント十二セット（一セットの所要電動機合計の馬力数、約千五百馬力、工場建物坪数約一万坪、従業員常時約五百名で、日本ではまだこの程度の規模のものはありませんが）、総額十二億六千万円の輸出契約を結びました。ソ連へのこの程度のプラント輸出は、これが初めてで、その後続々と大きなプラント輸出が引きつづいて行なわれるようになって

参りました。当時と致しましては、私共は勿論通産当局をはじめ一般にはソ連との延払輸出には、大きな不安がありました、寧ろ冒険のような気も致して居りました。

と申しますのは、敗戦直前にスターリン支配下のロシアは、戦時中の日本の信義を裏切つて日本との不可侵条約を踏みにじつて、今將に崩れ落ちんとする日本の背後をついてあのような残虐な火事場泥棒のような事をやった。そのロシアと機械の契約をする事については、あまり気乗りがしなかつたのでありましたが、やつて見ました結果は、現在のロシア、フルシチョフの支配するロシアは大変真面目で、寧ろ東南アジア諸国との取引よりも遙かに紳士的で、契約の履行も正確でありますので、現下のロシアには認識を改めて見直して来たのであります。これは従来、対共産圏諸国に対する日本の官民ともに従来の認識を改める必要があるのではないか、あまりに過去の事や、その政治的イデオロギーに捉われて、所謂喰わず嫌いをやって

居る嫌いがあるのではないかと痛感させられた次第であります。

さて、モスコで特に私の感じた事——それは単に私の短い滞在中の独断でなく、長くロシアに滞在するソ連通の日本人の皆さんからも同じ事を聞いた事ですが——の二、三を申し上げますと、

(1)ロシア人、特にスラブという人種は実に親しみの持てる、そして純真など申しますか、お人よしである事、馬鹿でないかと思う程お人よしという感じが致しました。貧しいながらも互い同士助け合うといった気分が、非常に強いように思われました。その良し悪しは別として、コルホーズ、ソホーズ等の共産主義、社会主義の国家が、よしそれが独裁政治家の圧力によってであつても、こんな社会制度が行なわれて居るのは、スラブ人の気風が大いに影響して居るのではないかと思われました。アメリカ人の氣質やイギリス人の氣質、また日本人に於てでも、なかなかこんな政治形態、社会組織には辛抱出

来ないのではないかと思われました。トルストイが龐大な領地を持つ貴族に生れ、その領地の大部分を農民に分ち与え、自分も農夫の苦しみを味わった彼は、ギリシヤ正教の教条主義に反抗しながら、なおかつ深い信仰を持ち教会から破門されながらそれでもなお人間愛を捨て切れず、『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』その他数十の文献を残した、そのトルストイが育ったのも、ロシアなればこそこの感も受けました。

(2)は、芯の髓まで「戦争は嫌だ」という気持ちを持つて居るように見受けました。ナポレオン、ジンギスカン、第二次大戦等、いつも外国から侵入され、ギリギリ迄追いつめられても、最後は必ずこれを撃退して、勝利を得て居ながら、なおかつ「戦争は嫌だ」「平和だ」と云つて居ります。この点、戦えば必ず勝ち、未だかつて寸土といえども外敵に侵入された事のないアメリカや、一敗地にまみれた日本人の云う平和愛好とは、ちよつと趣きを異にして居る感が致しました。緩やかな天然自然の地勢、茫漠たる沃野、茂った森、豊かに流れる大河等の懐ろにいだかれて、家鴨を飼ひ羊を飼ひ麦を作つて、のどかな生活を楽しんだスラブ人のゆつたりした気持がそうさせたのでありましようか。

(3)は、子供を可愛がるといった盲目的だという事です。それが自分の子供だけでなく、他

人の子供でも子供と来たら目が見えぬといった感じですか。これもやはり、純真な童心と申しますか、無邪気の気持に憧れる気分の現れかも知れません。

(4)は、教育、特に科学、芸術の面への熱意は大したもので、学資は全部国家負担で、小学校からピオネール(パイオニア教育です。日本の中学、高校程度の少年に天下国家を背負つて立つ開拓精神を植えつけるための少年教育です)から大学まで、特にモスクワ大学の規模といつたら、およそ日本の大学と比較になりません。

その他政治、経済の問題につきましては種々の長所、短所がありますが、全てはマルキシズムによる一國社会主義を奉じて行なわれて居りますので、自由主義国家とはおよそすべてに於て異つて居りますが、只一言申し上げたい事は、成程現下のフルシチョフ政権の下でのロシアでも、共産党員を中心とする独裁政治を行なつて居りますが、それは日本の多くの人々の考へて居るような、スターリンの支配下に於けるような古い型の独裁政治でなく、極めて真摯な研究的態度で、民衆の気持を良く考えながら全ての施策を現実的にやつて居るだけは確かだと思ひます。例えば、ロシア人大衆の「平和愛好」「戦争絶対反対」の気持は、フルシチョフの「平和共存」の外交政策にも十分現れて居ると思われました。それなくしては、細分すれば

三十の民族、十八の共和国を一九とし、二億二百万の民衆に民族意識を捨てさつて、只一つのU・S・S・R、ソ連邦という国家意識をもち上げた今日のソ連の繁栄は生れなかつたでありましよう。

尚、私は、約二十日間程、ストックホルム、ベルリン、フランクフルト、ジェノバ、ローマ、パリ、ロンドン、コペンハーゲン等を見て参りました。特に英国ではイートン・スクール、オックスフォードのカレッジ、ストックホルムでは郊外のベーリングビーの世界的に有名な新しい都市の建設、運営、機構等を見学して大變得る所がありました。

西欧諸国では、ウエストミンスター・アビーの大英帝国の多くの英雄、帝王の肖像や、トラファルガル・スクエアのネルソンの銅像、ベルサイユ宮殿でルイ十四世、ナポレオンの肖像やその他の色々のものを見て参りました。多くの観覧者達は三歎しつつこれ等に見入つて居りましたが、私は一向に興味がわきませんでした。私の脳裏を去来したものは、これ等英雄や征服者達は、その当時その一國、一民族の勝利と繁栄とうつるな名譽のために、大きなゲームをやつて、多くの血を流し、民衆を苦しめた記念に過ぎぬような気がして、却つて東方の游子の心をすさませるだけですからありません。

そんなものよりも、やはりロシアでヤースナ

ヤ・ポリヤーナのトルストイの墓参をして、この文豪がありし日、『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』を書いた居室、愛用の机、ベッド、日用品等を見た時、またはフランクフルトでゲーテ・ハウスを訪ねた時、或はまたジェノバでバイロン・ストーンに手を触れた時、或はまたローマでミケランジェロのモーゼの像の前に立った時、私に与えたショックと申しますか、これらの人達の人柄が偲ばれて、恍惚とした時の印象こそ、私の生涯に忘れ得ぬものを残しました。やはり、真なるもの、美なるもの、善なるものこそ、時代と人種を超越して人を動かすものがあるのでありましょうか。

御清聴を感謝します。

※当DVD収録の「講演録」には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。